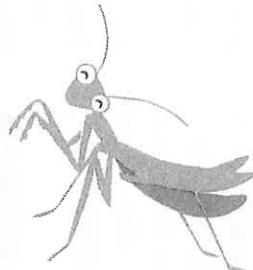


変える・守る・育てる・創る

第14回

女だから経営論

取材・文 三好 かやの



百姓俱楽部のトレードマークであるニッコリ笑うメスの(?)カマキリ

百姓俱楽部

鶴見文子さん 石島敦子さん 柴森清美さん

〒304 茨城県下妻市大字黒駒1084-1 TEL 0296-43-9559

Profile

農事組合法人 百姓俱楽部

下妻地区を中心に、県内認定農家のネットワークづくりをめざして発足。通販・宅配センターなどの集配施設を通じ、地域流通のほか外食産業、産直団体、青果市場、地域スーパーなどへ出荷している。分析センターで土壤・植物分析を行っているほか、地元スーパー「主婦の店ナカムラ」の生ゴミを堆肥化して畑に戻すプロジェクトを開始。今後も地元企業、学校、一般家庭も視野に入れた、独自の堆肥プラントの建設を検討中。



鶴見文子さん

1951年生まれ。百姓俱楽部理事
水田60a、畑100a、ハウス20a、でトマト、キュウリ、メロン、レタス、ブロッコリーを栽培。蔬菜、ネットワーク部門を担当。夫は代表理事の清忠さん。1男2女の母。
「住民の皆さんを巻き込んで、堆肥プラントを作りたい。私たちにもきっとできるはず」



石島敦子さん

1962年生まれ 百姓俱楽部理事
米9ha、作業受託12ha、小麦5ha、野菜1haを栽培。肥育牛8頭。米、ネットワーク部門を担当。夫は理事の和美さん。2男1女の母。
「出荷用のものと自家用は別という生産者がいるけれど、それはおかしい。うちはお客様に出すものも、自家用も一緒です」



柴森清美さん

1963年生まれ 百姓俱楽部理事
梨120a、キウイ10a、米100aを栽培。会計監査、ネットワーク部門を担当。夫は理事の秀明さん。2女の母（取材後に3人目誕生）。
「農家は、小さな子どもがいても、出産間際でも、自分のペースで仕事を続けられるところが、いいなあと思います」

茨城県下妻市の農事組合法人「百姓俱楽部」は、97年2月に発足した。発起人に名を連ねるのは、鶴見、石島、柴森さん3夫妻と、若手生産者の田崎浩幸さんの7名である。このうちの女性メンバー3人に、事務所でお会いした。
スッと差し出された名刺の肩書には、全員「理事」の二文字。名前の横でなぜかトレードマークの「カマキリ」が鎌を掲げて、ニッコリ笑っている。さて、このマーク、一体何を意味しているのだろう？
「カマキリって、卵を宿して産む前に、オスを食べちゃうんですね。子孫を残すためにお母ちゃんが頑張る」と、石島敦子さん。いい生産物を作ることは、それぐらいの心意気が必要だという意味が込められているらしい。母ちゃん恐るべし。ところで、当の「オス」の皆さんとは、それでもいいのだろうか？
「どうせいつも食われるから（笑）。どこのお父さんもその方がいいんだよ」と笑い飛ばすのは、代表理事の鶴見清忠さんである。かたや、妻の文子さんは、「そうやって、女の人たちを持ち上げているのかもしれないですね。やっぱりいつも一緒に仕事しているわけだから、お父さんが何でも知っていて、お母さんがわからないとなると、作業にも係わってくるし、家族関係もうまくいかなくなるし。農家をやつっていくには、同じ土俵で話ができないとね」

百姓俱楽部の会合は、毎週土曜日の夕

母ちゃんに「食われて」でもいいものを作りたい

方に行われる。もちろんそこにはちゃんと「父ちゃん」たちの姿もある。食われていなくなってしまったわけではない。土のこと、堆肥プラントのこと、今後の展開について……仕事に係わるありとあらゆる話題を共有している。

農業は母ちゃんを前に出す方がうまくいく——”カマキリの微笑み“は、そんな思いを象徴しているのかもしれない。

**土の中でも蠢く
微生物の姿が見えた！**

百姓俱楽部の前身は、96年の1月に始まつた、鶴見、石島、柴森の3人のお父ちゃんたちによる、土の勉強会だった。長年の化成肥料の投入により畑が痩せ、その影響が作物に出ているだけでなく、地元の環境悪化も導いている。そんな懸念が出発点だった。



メンバーの夢をつないでいる堆肥プラントの前で

3人の中で、いち早く土づくりの重要性に気づき、堆肥の投入を開始していったのは、梨を作っている柴森さん。でも、妻の清美さんは、「最初は主人ばかりがいろいろな会合に出たり、話を聞いたり。家に帰つて私に話してくれるんだけど、『また言つてる』って感じでピンと来ませんでした」という印象だつたようだ。1年間の勉強会の途中で若手の田崎さんが加入。

百姓俱楽部発足

3人の中で、いち早く土づくりの重要性に気づき、堆肥の投入を開始していったのは、梨を作っている柴森さん。でも、妻の清美さんは、「最初は主人ばかりがいろいろな会合に出たり、話を聞いたり。家に帰つて私に話してくれるんだけど、『また言つてる』って感じでピンと来ませんでした」という印象だつたようだ。1年間の勉強会の途中で若手の田崎さんが加入。

百姓俱楽部発足

A 全部！

3人から一様に同じ答えが返つてくる。そんなやる気十分の「母ちゃん」たちが手を取り合うことなどが起きるのだろうか。

百姓俱楽部では、「土壤支援センター生命工房」の協力の元、それぞれの圃場の土壤分析を行うようになつた。自分の畑の状況が顕微鏡の画面を通して、ビデオに映し出される。

「ビデオを見た時に、すごく感動しちゃいましたね。今まで化成肥料に代わる肥

材当日次女の映美ちゃん（2才）を同行。お腹には出産間近の第三子がいた。柴森 「今年の梨の収穫もやりました。無理するわけじゃないけど、ギリギリまで自分のペースで働いてますよ」鶴見 「私も二人目はトマトのハウスの中で産気づいたわ」石島 「私はホウレンソウやつてたらお腹が痛くなつた。適度に体を動かしてからお産は軽かつたね」

そんな3人に同じ質問をしてみた。

Q 苦手な農作業は？

A ……ないです。

地元スーパーの生ゴミを堆肥にして土へ還らす

また、百姓俱楽部では、以前から野菜の販売を通して取引のあつた、地元のスーパー「マーケット「主婦の店ナカムラ」と協力し、スーパーが排出する生ゴミを、堆肥に変えて土に戻すプロジェクトを開

やしだと思つて入れていた堆肥が、実は「これから農業は、男だけではやつていけない。一番のパートナーである妻たちの意見も取り入れよう」と、3人の女性メンバーが加わることになつた。

今は、実際の土の中の様子を自分の目で見られる。それが一番の楽しみです」と石島さんも、柴森さんも、「主人に話で聞いていただけと、自分の目で自分の土を見るのとでは、大違い」こうして、3人の母ちゃんたちは、頼もしい同志になつたのである。



主婦の店ナカムラ

変える・守る・育てる・創る 女だからの経営論

始した。

1tあたり約2万円ものコストをかけて、生ゴミを処理していたナカムラと、良質の堆肥を作るために、材料の生ゴミを大量に必要としている百姓俱楽部の利害と、「安全でおいしい作物を届けたい」という両者の理想が一致したのだ。

ナカムラから投入された生ゴミは「自然派総合研究所」の堆肥プラントに集められ、約5ヶ月をかけて熟成され、土に還されていく。その効果は?

「すごくキメの細かいキュウリができるんですよ。一度折ってまたくつづけると離れなくなるくらい。例年はシーズンも後半になると、B級品やC級品が多くなるようになります。でも、今年の秋は、堆肥を入れたおかげで最後までA級品が続いていました」と鶴見さん。

「梨の場合、まつたく農薬をかけないわけにはいかないけれど、堆肥を入れるようになつて、散布の回数が減つたし、以前より濃度を薄くしても、同じ効き目があるんです。木が変わつて、いくのがわかるんです」と柴森さん。下妻地域には、地下30cmの深さに一様に固い岩盤が走っているそうだ。でも、柴森さんの畑の土壤は、長さ1mの棒がスーと抵抗なく入つてしまふほど柔らかい。

「微生物が、一生懸命耕してくれたお陰だよね」

と、石島さん。こうして作つた堆肥は理事の畑はもとより、百姓俱楽部の趣意に賛同する、約50人の会員たちにも提供される。いざれも品質の高い農産物がで

きると好評だが、堆肥の絶対量が足りず、目下順番待ちの状態。材料となる生ゴミや有機物もまだまだ不足している。

「地域の生ゴミを有効利用した、百姓俱楽部独自の堆肥プラントがほしい」

新たな目標が浮かび上がつてきた。

に越えて、地域全体を巻き込んだ一大プロジェクトである。

そんな、3人の話を聞いていると「農村は都会に比べて女性の自立が遅れている」とか「意識が低い」なんて言つてしまふのはどこのどいつだ?と思つてしまふ。みんな立派な共同経営者ではないか。

「県政からどんどん見放されていく中で俺たちがこういう事をやりだせば、下妻は、土を大事にしていい物作つている所だつてP.Rできる」

と、清忠さんは語る。下妻市の人口は約3万4千人、都市化の波が押し寄せることもなく、これといった大資本による介入もない「谷間」だからこそ描けるプロジェクトなのかもしれない。

「学校給食も、子どもたちは好き嫌いが激しくて、いっぱい残飯が出るらしいんです。今はそのまま焼却しているようですが、それを私たちがちゃんと処理して堆肥にして、最終的にはそれを使つた私たちの野菜や米を食べてもらえるようになれば……」

と石島さん。当初は「死んだ土」を蘇らせるために復活した堆肥が、今、環境的にも経済的にも地域全体が息を吹き返すための、切り札になろうとしている。

さらに、家庭の生ゴミを投入するには分別の徹底など、住民サイドの協力も不可欠である。

「先に家庭の生ゴミを使つたプラントを実現させた山形の長井市の例もあるしきつと私たちにもできるはず」

と文子さんは、夢を膨らます。そんな風に夢を熱く語る時の彼女たちの目の輝



ナカムラの店頭には、メンバーの野菜が並ぶ

県政の谷間で 大きいに夢を膨らます

茨城県の西部に位置する下妻市は、首都圏と直結する交通機関も、目立つた産業も観光資源もない。経済開発においてはほぼ手つかず状態。「県政の谷間」と呼ばれている地域だ。

そこに独自の堆肥プラントを設立して地域の生ゴミを有効利用する。スーパーや事業所だけではまだ足りない。

学校給食も、家庭の生ゴミも取り入れて、良質の堆肥を作り循環させていく。そんな壮大なプロジェクトが、これから始めようとしている。

「化学肥料はお金を取りられるだけじゃなく、土も殺すし水も悪くなる。今、どうしても堆肥が必要なんです。それには各農家の経済的な負担を少なくしなければ。いい堆肥ができるだけ安く手に入れることができます」と鶴見清忠さん。

プラント建設費は、土壤分析センターや集出荷場の分も合わせて、ざつと1億2千万~5千万円。県下と国に補助金を申請中である。98年中には実現にこぎつけたいと考えている。

これはもう、家業、協業の域をとつく

きときたら……。これは決して父ちゃんの受け売りではない。

そんな、3人の話を聞いていると「農村は都会に比べて女性の自立が遅れている」とか「意識が低い」なんて言つてしまふのはどこのどいつだ?と思つてしまふ。みんな立派な共同経営者ではないか。今、母ちゃんの活躍なくしては立ちいかなくなつている農家がゴマンとある中で、ちゃんとそれを評価して、表舞台に引っ張り出した男たちも、すごぶるエラいと思う。

産直にせよ、堆肥プラントのための生ゴミの回収にせよ、生産物が行き着くそんの先には、必ずその家の「母ちゃん」がいる。四角四面の顔をした親父が直接アプローチするより、間に農家の「お母ちゃん」たちが入る方が事はずっとスマーズに運ぶに違いない。

土の命を循環させる切り札が堆肥だとすれば、これから人と人の繋がりの輪を巡らせていく要になるのは、こんな「農家のお母ちゃん」たちなのかもしれない。